

耕作放棄地活用し野菜生産

建設業者が農業に挑戦

豊岡市日高町の建設業者らが設立した農業生産法人が、耕作放棄地などを活用した野菜の栽培に挑戦している。但馬地域や神戸市内の直売所で好評を得ており、今後、加工業も含めた「第6次産業」への進出を視野に入れている。関係者は「但馬の風土や知恵を生かし、地域を元気にする農業のシステムをつくりたい」と意気込んでいる。(長嶺麻子)

第6次産業は、農作物や水産物を生み出す1次産業と、製造する2次産業、3次産業のサービスマニを組み合わせ、商機を広げるという新しいビ



耕したほ場の前で、第6次産業に詳しい県立大大学院の佐竹隆幸教授に、今後の展開を相談する新免さん(左)と田村さん(中央) 豊岡市日高町夏栗

日高の新免さんら 法人設立、加工も視野に

ジネス様式。若者の働く場が少なく過疎傾向にある地域や、不況で市場規模の縮小が進む業界が注目し始めている。公共事業が大幅に減少している建設業界もその一つだ。「少ない仕事を地元で取り合っても意味がない」と考えていた建設業の新免将さん(39)は、同時に地元農家からよく「跡取りがない」という声を聞いていた。そこで、人的資源のミスマッチを解消する仕組みづくりができないかと、農業分野への参入を決めた。2年前、同じ構想を抱いていた同業者の田村寛さん(44)と商工会を通じて意気投合。2009年6月に新たに20代と50代の農業者2人を雇用して、農業生産法人「Teams」を設立した。重機を手早く操作して、耕作放棄地や資材置き場を整備し、土を入れて農地に仕上げた。

本業の傍ら、試験的に野菜の栽培を続けていた田村さんが農業技術を担い、新免さんは地元の耕作放棄地の所有者と掛け合って農地を借り受けるほか、販路の開拓を図る。現在、耕作面積は4カ所で計2ヘクタール程度まで拡大。無農薬栽培のタマネギや

オクラなども順調に育ち、直売所での売れ行きも上々という。パブリカやスイートコーンなど、少量多品種にも挑戦しながら、冬にはハウス栽培も始めるといふ。地元特産品の生産者らと親交を広げ、地域資源を生かす商機も探る2

人。田村さんは「農業は難しいが、素人なりの大胆な発想を大切にしたい」と語り、新免さんは「今まで知らなかった人と出会い、刺激を受けている。総菜づくりや飲食店の運営に挑戦し、雇用の創出を実現したい」としている。